

## 武田泰淳と現代中国の知識人

——郭沫若の場合——

郭 偉

一九七一年十一月、人民文学出版社（中国）から出版された『李白と杜甫』は、事実上、郭沫若の最後の著書である。それは、郭沫若の夥しい著作の中で、構想と執筆にかかった時間も長く、また論争のもっとも多い書物とされているが、中国国内における同書に関する批評は、郭沫若が亡くなった一九七八年以降、ようやく展開されるようになったのである。そして、同書における杜甫についての評価、具体的な引用と考証に関する批判の多くは、先行する日本の同時代評の一部に非常に近いところがある。郭沫若のこの著書は、時代の刻印を深く受けているのは事実であり、それについての批判は、文化大革命当時の中国の文化状況、文学研究全般の歪みに対する当然起るべき反省だが、文革に同調した、もしくは同調させられた知識人の典型とされる郭沫若に対する分析も、同書に関する限り、その執筆の動機・目的についての考察によって、より深くかつ多角的に試みられている。その点から言えば、当初からそれが同書の執筆の隠された動機であったかどうか定かではないが、広く知られている古典を取り扱ったがゆえに、郭沫若の同書は、結果としては、出版当時の中国の文化状況、学術動向、乃至、いわば当時の中日における「価値体系の違い」を、日本の研究者たちに忠実に伝えていたと言える。さらに、一九七二年前後、中日国交回復の動

きと平行して、同書がさまざまな思惑で日本に翻訳、紹介、あるいは言及、批判、ないし黙殺されたこと自体、当時の中日文化・学術交流、及び日本における中国文学研究の一側面を映し出しているようにも考えられる。

一方、かつて司馬遷と杜甫との間で「運命的な」二者択一的選択をしたにも関わらず、武田泰淳は、旅行記、エッセイ、小説など、杜甫関連の文章もいくつか残している。泰淳と郭沫若とは、中国文学研究会の設立の時から直接、交流を持っていたが、一九七〇年代、日本では「台風の目」的な著作とされていた郭沫若の『李白と杜甫』については、泰淳はどのように考え、どのように反応したのだろうか。武田泰淳における郭沫若について考えるとき、当然ながら、その杜甫研究も視野に入れなければならないと思われる。本発表は、郭沫若の『李白と杜甫』、とりわけその杜甫研究に関する、日本の同時代評を確認した上で、「泰淳における杜甫」を分析し、さらに泰淳における郭沫若認識、及び両者の相互関係について検討してみた。